

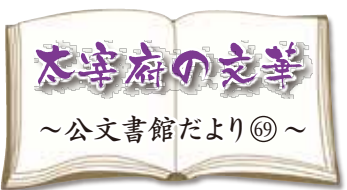
鎮西探題の設置と少弐氏・大友氏

鎌倉期の九州御家人の中で、少弐氏と大友氏は他の武士たちより優位な存在で、「鎮西東・西奉行」などと呼ばれることがあります。蒙古襲来後、戦後処理を博多で行った弘安7（1284）年の徳政の使いの合奉行や同9年の鎮西談義所頭人にも、少弐経資と大友頼泰が選ばれており、同年、この両人は幕府から九州武士への蒙古合戦勲功の恩賞配分を命じられています。

一方で、蒙古襲来により、北条氏は九州への直接支配を強化しました。建治元（1275）年には北条実政、弘安4年には北条時定が異国征伐計画のため九州へ下向したといわれており、少弐氏や島津氏の守護国の一部は、北条氏の管国へと代わりました。

北条氏の九州支配を画期的

に進めたのが、正応5（1292）年に「異国打手大將軍」に北条兼時・時家が選任され、翌年相次いで九州入りしたことです。両者は九州全域に及ぶ異国警固と聴訴権（裁判時に取り調べをすること）を有しており、初代鎮西探題（鎌倉幕府の九州出先機関）といわれています（異説あり）。2代目探題となった北条実政が永仁4（1296）年に再度九州に下向すると、北条氏の九州支配はさらに強大化します。実政



は確定判決権（判決文を発行できること）をもち、裁判機能を補佐するための鎮西評定衆・鎮西引付衆（永仁7年設置）を下部機関として備えました。

少弐氏・大友氏の当主は、鎮西引付衆の頭人を務め、のちに鎮西評定衆も兼務しました。また、探題が任じられない期間には、探題に代わって異国警固他の業務をするよう幕府に命じられていました。この点で、他の九州

武士に対する優位性はまだ担保されていたといえます。ただし、鎮西探題の設置により、これまで九州武士の中でトップの地位にあったものが、相対的に下がったことは否定できません。

正慶2（1333）年、少弐氏・大友氏らにより、鎮西探

題は滅ぼされますが、こうしたことへの不満が顕在化したと解釈できます。特に博多にいた鎮西探題と大宰府にいた少弐氏は、同じ筑前を拠点とする点で、もともと内在的な競合関係にありました。この関係は室町時代に幕府の九州出先機関である九州探題が博多を居所とした際にも受け継がれ、室町期の九州政治史において大きな要素を占めることになるのです。